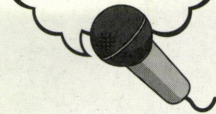


インタビュー



「まめやかさ」

人として人に応える

津守真・房江夫妻に聞く（その2）

聞き手 江波諄子

●峻厳さと洒脱さと

津守真（以下M） 倉橋先生をご自宅に訪ねると、先生はいつも和服でした。私はご自宅で会ったことしかない。大学で倉橋先生に会ったことはありません。ご自宅で会う先生は穏やかで、しかし芯のある方でした。

江波（以下E） ご自宅でそのように会われて、倉橋先生に「峻厳さ」を感じたと津守先生はおっしゃい

ますが、おうちでくつろいでいる人の良いおじいちゃんに会われるような感じではなかったのですね？

M そういう感じではなかったですね。倉橋先生は穏やかなのだけれど、峻厳さを感じさせる。私はその時の倉橋先生よりも現在はだいたい年上になっているのだけれど、そんなふうではない。本当にあのころの倉橋先生は、私から見ても大人に見えました。武士道的な、そういう厳肅なところ。それは僕だけでなく、ほかの方もそういう印象をもったのではない

かと思えます。

E やはり実際にお会いしていないとわからないですね。そのころ学生だったり、あるいは現場で保育をされていたりした方々からうかがったお話だけで想像したのとも異なりますし。

M しかし一方で、倉橋先生はとても洒脱でくだけたところもある方なんです。

津守房江（以下F） 歌舞伎もお好きで、附属幼稚園の先生を引き連れて、よく歌舞伎にも行かれたみたいですね。倉橋先生の奥様から聞いたその時のお話が、すごくおもしろかったですね。情景が思い浮かぶように話す、チャキチャキの江戸っ子の語りです。

M たくさんあって全部は思い出せないけれど、本当におもしろかった。及川先生^{註1}などは、倉橋先生のそんな面もご存じなのですよ。

E 倉橋先生と津守先生との年齢が四十四歳違うん

ですよ。その間に幼稚園の先生としての教え子はいろいろな方がいらつしやいましたけれど、学問として保育に向き合ってきた人は少なかったのではないかと思うのです。ですから、倉橋先生にすれば、これから同じ学問の道を進む若い同志、ご自分から四十四年ぶりの学生に向かい合うという出会いだっただのではないかと思えます。

M 最初に出会った時から倉橋先生は、武士道的峻厳さ、真に光るものを感じさせる人でした。「心理学者・倉橋」ではない、「人間・倉橋」に出会った、ということだろうと思います。

F 人間が大好きな、人間研究者倉橋、ということかと思うのだけれど。

●一人の人間として互いに会う

E 倉橋先生のような方と出会う時というのは、大きな感化を受ける、ということが一般的に想像され

ますが、津守先生の場合はどうだったのでしょうか。やはり津守先生の中にはすでに、無意識のうちに、一人の人間としての出合いを大事にというような思いがあつたのでしょうか。

M 一人の人間として出会うというのが、先にお話ししたように、一番初めから、それはしつかりと私の中にあつた。倉橋先生には初めて会つた時から、この人は信頼できる人だと感じました。これもまた不遜な言い方かもしれないけれど、倉橋先生もそう感じられたのではないかと思います。

F 不遜というのも、ある意味、本当だと思つてですね。若くして、意気盛ん、あくまでも自分は自分として、人に取り込まれてしまわないでやっていこうとする、という意味での不遜。上の人の理論にだけくつついていこうとする、というのではなく、自分では自分でいこうとする気持ちで津守には非常に強くあつたように思います。

M 先ほど来、読んでいる日記の、昭和二十四年五月二十一日土曜日。このころ僕は倉橋先生の家に、一度ならず二度三度行つて居るのですよ。行つた時に起こつたことや様子をいちいち書いて居るわけではないのだけれど……。この日、初めてお訪ねした時のことを次のように書いています。

「子どもの世界に生き、その中で呼吸をする気持ち。わたしはそれをこのうえなく珍重し、尊敬する。人間と人間の社会とを客観的に科学的にみていく道、それをわたしは進みたいと思う。今はもう、わたしは大きなことは言うまいと思う。現実のこの世界をできるだけよく生きていくことを考えよう。ひとは現実を最善に生きることを考えるのが一番良さそうだ。どんなに高尚な理想もそれを抜いては意味がなさそうだ」(日記からの引用)。

倉橋先生のところから戻つてきてから、こういうふうな、自分勝手な抽象的なことを書くんですよ。

もっと現実のね、先生と会った時のことを書いておけばよかったものを、僕の悪い癖でね、こんなことを書いてあるわけですね。

F あくまでも自分として向き合う、ということなんでしょうね。取り込まれてしまうのでなく。倉橋先生の言葉にうっとりとして、倉橋先生にくっついてそれでやっていこう、というようなことではないのです。

●まめに動く保育者

E その後、津守先生はアメリカに行かれますね。

M ちょうどそのころ私は、Child welfare という言葉を知っていたんですよ。わたしは○田図書館に通い詰め、A.ゲゼル^{註4}などアメリカからの新着の本を読みあさっていました。

E では、すでにそのころのアメリカ児童心理学会がどんな感じかというのをご存じだったのですか。

M 知っていました。それで、アメリカに行つてみたいという気持ちはずっともっていましたね。

E ゲゼルが影響を受けたスタンレー・ホール^{註5}は「子どもを知り、愛し、子どもに奉仕することはもっとも崇高な人生活動である」という言葉を語ったようです。また、倉橋先生は「教育は育つ者に対する久遠の信仰である」とおっしゃり、この言葉も同様に、保育の奥深さを語っているように思います。それからもう一つ、倉橋先生に代表される教育におけるロマン主義というのが、いま一つわからなかったのですが、津守先生がどこかで、「教育におけるロマン主義者というのは、明日この世が終わるかもしれないとも、明日に希望をもって、子どものそばに居続ける人だ」とおっしゃいました。津守先生のこの言葉を聞いて初めて、よく言われる児童中心主義とかロマン主義というものが、具体的な実践者の行為として、自分なりにわかったような気がしました。こ

これらの名言は、いまの若い学生とも充分分かち合えます。倉橋先生が学ばれた当時の心理学は、いまの心理学とはずいぶん違っていたのでしょうか。

M いままでいう科学的心理学ではないですね。倉橋先生の指導教官の元良勇次郎先生は、理論家でしたが、幼児のことをやろうとする倉橋先生に対し、とても寛容で理解があつたようです。私の指導教官の高木貞二先生は、厳密な方法論を考えて強調し、講義していました。文学部心理学は、ずっと哲学の範疇はんちゆうでした。

E 当時の心理学科は哲学を基盤に、そうやって心理とか保育をやっておられたと思うのですが、その後何十年も経つと哲学と心理学というのは距離ができてきますよね。先ほど先生の日記にありましたように哲学をもちつつ、客観的科学的に人間を見ていくというあたりが、その後、狭いとらえ方になつていったといえるのでしょうか。

M そのような狭い、客観的、科学的ということでは保育はとらえきれない。その子が何を求め、何を欲しているか、それに応えるにはどうすればよいか。理屈や理論を考えることは置いておいて、人間として、できるだけ素直に、子どもに応答しなければならぬのです。

E 倉橋先生は、驚く心そのまますぐに実際のまめやかさになる人、そういう人が実践教育者であるといっていますか……。

F 「まめに」、という言葉葉を、このごろの人はきつとあまりつかわないでしょうけれど、実際の保育者は、心も体もまめに動きますね。骨惜しみをせず。M その子が怖がつたりしないよう、人間として子どもに応答するために、大人の側に、まめに動くエネルギーが必要ですね。あらかじめ決めておいて、考えておいて動くことも必要かもしれないが、まめに動く中で、新たな考えが思い浮かぶこともあるで

しょう。立場が違っていろいろな人が子どもにかかわって、お互いに元氣を出し合い、励まし合う。私もいつの間にか倉橋先生の年齢を超えて久しくなりましたが、保育の中で大切にしてきたことは、子どもの側に立って考えることで、そのことは何十年たとうが変わりません。

〈インタビューを終えて 江波諄子〉

本当に密度の濃い一日でした。子どもの自主性を大事にされた倉橋先生が、実は子どもにも大人にも、人間としての自主性・主体性を大変重んじられていたということがわかりました。また熟年の倉橋先生が若き学徒津守先生を温かく迎え入れ、その青年に託した配慮や期待感が浮き彫りにされたように感じます。保育学はまだまだ認知度が低く、この道を歩もうと決意した若者への、年長者の悦びと心配りは、もう一つの「育ての心」のように思えます。

津守真・津守房江(保育研究者)／江波諄子(常磐大学)

記録：山下紗織(お茶大大学院生)

構成：菊地知子(お茶大幼児プロジェクト)

注

- 1 東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)附属幼稚園保母、お茶の水女子大学附属幼稚園園長
- 2 津守真「わたしが幼児教育を志したころ」
〔「幼児の教育」第九十八巻第十一号から第一〇〇巻第十二号に連載〕を参照
- 3 戦後アメリカの「民間情報教育局」のことで、日本の民主化を進めるために全国各地に図書館をつくり、アメリカの英文図書や定期刊行物が一般市民に開放された。その後、ACC(アメリカ文化センター)、さらにAC(アメリカンセンター)となる。
- 4 アメリカの心理学者、小児科医。子どもの発達研究分野のバイオニアとされる。一八八〇～一九六一
- 5 アメリカの心理学創設期の心理学者
- 6 日本最初の心理学者
- 7 実験・動物心理学者